

学位論文審査の結果の要旨

1. 申請者氏名	庾 凌峰
2. 審査委員	主 査：（兵庫教育大学 教授） 小南 浩一 副主査：（上越教育大学 教授） 茨木 智志 委 員：（兵庫教育大学 教授） 米田 豊 委 員：（兵庫教育大学 教授） 南埜 猛 委 員：（兵庫教育大学 准教授） 福田 喜彦
3. 論文題目	戦前・戦中（1920—1945）の中国（台湾、香港を含む）における賀川豊彦の交流活動とその受容に関する研究
4. 審査結果の要旨	<p>教科教育実践学専攻社会系教育連合講座 庾凌峰から申請のあった学位論文について、兵庫教育大学学位規則第16条に基づき、下記のとおり審査を行った。</p> <p>論文審査日時：令和2年2月13日（木） 13時50分～14時20分 場 所：兵庫教育大学神戸ハーバーランドキャンパス 演習室 3</p> <p>1. 学位論文の構成と概要</p> <p>(1) 論文の構成</p> <p>序章</p> <p>第Ⅰ部 戦前・戦中の中国における賀川の交流活動</p> <p>第1章 賀川と黄日葵一五四期の北京大学学生訪日団団員黄日葵の「贈賀川豊彦先生」を中心に</p> <p>第2章 「神の国運動」と「五カ年運動」—賀川と誠静怡の関係をを中心に</p> <p>第Ⅱ部 戦前・戦中の中国における雑誌や新聞からみる賀川像</p> <p>第3章 民国期の中国における賀川に関する報道—『東方雑誌』と『大公報』を中心に</p> <p>第4章 民国期の中国における賀川に関する報道—『大陸報』を中心に</p> <p>第Ⅲ部 台湾・香港における賀川の交流活動とその受容</p> <p>第5章 『台湾日日新報』からみる賀川と台湾との関係—大正期・昭和戦前期の台湾訪問を中心に</p> <p>第6章 賀川と香港—賀川は香港の新聞や雑誌にどのように報じられたか</p> <p>終章</p> <p>(2) 論文の概要</p> <p>本研究は、膨大な賀川豊彦研究がある中で今まで使われてこなかった新資料を用いて、民国期の中国（台湾、香港を含む）における賀川の活動とその受容を中心に</p>

研究したものである。クリスチャンであり社会運動家でもあった賀川が繰り広げたこれらの国々や地域での活動が、現地でどう受け止められ、またその活動がどのような影響を与えたかについて考察した。

第1章では、広西籍初の中国共産党員であった黄日葵をはじめとする北京大学訪日団五人組が、神戸の貧民窟に賀川を訪れた経緯を整理し、黄日葵が賀川へ感謝を込めて「贈賀川豊彦先生」と題する詩を著した背景を考察した。これを契機に吉野作造の後継者として賀川が中国でにわかに注目されるようになる。

第2章では、賀川と中国キリスト教会の幹部であった誠静怡との関係史を考察し、日本の「神の国運動」と中国の「五カ年運動」の関係、および賀川が「五カ年運動」に与えた影響を明らかにした。

第3章では、学術雑誌『東方雑誌』における賀川の報道を労働運動、著述関係、廃娼運動、農民運動、無産政党運動に分けて考察した。一方、政論系新聞紙『大公報』においては、時系列で1920年から満州事変、満州事変から日中戦争の勃発、日中戦争以降という段階での賀川報道の変化を考察した。

第4章では、上海で創刊された英文日報である新聞『大陸報』の賀川報道58件を整理し、賀川が中国でどのように報道されたか、賀川が中国を訪問した際に中国人にどのように評価されたかを概観した。

第5章では、1922年、1932年、1934年、1938年の賀川による台湾訪問の足取りを追い、当時、賀川が台湾でどのように報じられたかを明らかにした。また、賀川の台湾観を、同じキリスト教社会主義者であった安部磯雄と比較して検討した。

第6章では、賀川と香港との関係に焦点をあて、賀川が香港とどのように関わってきたか、香港における新聞や雑誌が賀川をどのように報じたのかを考察した。

終章では、本研究の意義及び、本研究が教科教育の実践にどのような貢献ができるかについて論じた。

2. 審査経過

(1) 本論文の意義及び独創性や発展性

本論文は膨大な賀川豊彦研究に新たな研究視角を提供するものである。今までの賀川研究で使われてこなかった、中国語や英語の新しい文献（史料）を用いて、従来の賀川研究の空白をうめた点に意義がある。

キリスト者であり、社会運動家であった賀川は、世界のキリストチャンネットワークを通じて、米国、ヨーロッパ、中国、オーストラリアなど、世界の各地を訪れ、それぞれの地域に大きな足跡を残した。本研究は中国における賀川の活動とその受容であったが、米国やヨーロッパにおける賀川の活動とその受容なども今後のテーマとして引き継がれるであろう。さらに、賀川が世界各国に与えた影響だけでなく、逆に、賀川がそれらの世界の国々や人々から受けた影響についても今後、検討されるべきであろう。そうした意味で本研究は大いに今後の発展性がうかがわれると言えよう。

(2) 本研究の社会科教育における示唆

本研究は歴史学の研究領域にあたる。しかし、本学の学位（学校教育学）からすれば、研究の学校教育への貢献も要請されよう。

本研究は新学習指導要領で新設される「歴史総合」という科目の目標に資する教材を提供することができたと考える。例えば、満州事変前後の1930年代に展開された賀川や中国キリスト教会、さらには国際連盟の新渡戸稲造によるキリストチャン国際運動は、日中間の対立緩和に向けた平和構築運動であった。あるいは日本の軍部による中国侵略に対する賀川の個人的な謝罪など、日中間の対立の中にも、融和をさぐる運動があったことを示している。こうした歴史的事実の提示は、生徒のみならず、日中両国民に対して、相手国に対する歴史認識の更新を迫るであろう。

3. 審査結果

以上により、本審査委員会は、 庾凌峰 の提出した学位論文が博士（学校教育学）の学位を授与するにふさわしい内容であると判断し、全員一致で合格と判定した。